

# 階機団ボキスロイド： 墨田地区奪還作戦

EMM@苗床星人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

古より人々を脅かす魑魅魍魎悪鬼羅刹

文明開化に混ざり伴天連より侵入する西洋悪魔

階差機関の浪漫の光に浮かれ、或は蒸気の影に闇に怯え暮らす帝都東京。

対抗するは破魔の人造詠唱を喉に宿し

人非ざる超力を身に付けし階差機関の申し子達。

階差発声詠唱機関式超力兵師団ボキスロイド！

墨田の地に天高く聳え立つは世界一の高さを誇る最新の蒸気発生機関基地、東亜天樹

その完成式典を襲うは空を埋める程の怪異が群れ！

地の底から溢れ出し帝都を覆わんとする瘴気を払うは、冴え渡る陰陽の術と蒸気の暴力！

ツイッター発、空想科学と浪漫と百合の花が繚乱跋扈する

ボキスロイドスチキムパンク怪奇譚

堂々の上映開始で御座います！

原案：六色団子

脚本・作画：E M M @ 苗床星人

# 目次

壺・壺：蒸気の塔（前編）

—

1

## 壺・壺：蒸気の塔（前編）

#階機団ボネロ

??冒頭ノ語り

此より語りますは遠き世界の怪奇譚。

此処とは違う異なる理、機械油と蒸気の支配する世界の物語。

何処かひどく懐かしき、あり得た世界を駆け抜けて

それでも鮮やかに綺羅めき続ける、ボネスロイド達の物語で御座います。

絢爛豪華たる帝京造りの街並みに、見知った面影を持つ道すがら。

此処は西暦は2019年、元号にして『麗話』元年の帝都東京。

人々は古くより傳わる陰陽の術を科学に組込み、西洋渡来の蒸気物理学と併せることで新たな文明を切り開くことに成功を納めていた。

地脈の数学的制御を行い、その嘶きたる大地震を予防し、恩恵たる効率的な農業の改革を成した

その結果、日の本は大地震の災害も大戦の戦禍も知ることなく世界最大の科学大国と

成り得たのである。

そして分岐点たる大正から時は経ち、唱和<sup>しょうわ</sup>、陸声<sup>へいせい</sup>、そして麗話の時代と流れていった。

……

……

……

『バルブ接続完了』

『陰性地熱伝導管感度、予定値よりマイナス零点玖℃下方修正……伝達に問題なし』

『充填式階差機関群並列化開始』

『トリコロールアーク、放電開始』

『第参型地殻炉大蒸気基地——東亜天樹閣、起動します』

『……!? 充填バルブ温度、急激に低下!』

『一気に昇ってきたのか!?!』

『退避、退避イ——』

オオオオオオオオオオオオ……!!

……

……

……

路面汽車が停まったのは、数百米先からも高い高い鉄塔の麓。

見渡す限りの人だかりに冷や汗を垂らしながら、少女は息を呑んだ。

「……………え、えと……………待ち合わせ、ど、ど、どこ？」

慌てて懐から地図を取り出そうとするも、自動扉が開いて間髪入れずに動き出した人の波。

少女は為すすべもなく押し流されていく。

「あちよつ……………待つ……………ゆ、ゆ、ゆかりしやああくん……………！」

時を同じくして、停留所から少し歩いたところ

人で賑わう商店街の一角で、更なる人だかりが出来ていた。

賑わいの中心には、それと気付かず懐中時計に目を釘つけにした軍服を模した奇抜な格好をした少女が一人。

「ねえ、ねえ、あの男装の麗人……………」

「きつとそうよー！」

「キネマ館ニコ座の花形役者、結月ゆかりだわ！」

通常、人は自分の名を呼ばれば気付くもの——所謂カクテルパーティ効果というも

のがある。

然してこの麗人、自分のことを呼ばれていようが黄色い歓声を上げられようが一向に気付く気配がない。

其れ処か徹底して無視している様子でさえある。

周りもそれで一向に構わずカメラを掲げて本人の許可なく撮影しているのであるが……

「……かり……しやあああ……ん……」

しかしその黄色い歓声のなかにその声を聞いたとき、結月ゆかりの手は懐中時計を懐に仕舞った。

ばさりと外套をはためかせ、行く先を埋める野次馬の一人にひと言。

「すいません、連れを待たせているので」

完全な営業スマイルとはこの事か、と言わんばかりの完璧な笑顔に撃ち抜かれ

所詮いちミーハーに過ぎない、野次馬は熱に浮かされたように（或いは聖人の滝割り  
の如く）一斉にその先の道を譲り開けた。

その先にはヨタヨタと歩く先の少女。

ゆかりに気付いたのか、その顔を見るや眼鏡の奥に涙を溜めて駆け寄った。

「あつ……ゆ、ゆかりしやああん」



「よしよし、人が多いのに大変だったね……」

少女を抱擁するゆかりの笑顔たるや、慈母の如き慈愛に満ちており  
先の笑顔とはまた違う魅力に野次馬は困惑する。

「だ、誰だあの少女は……!」

「ゆかりさんとあんなに抱き合つて……うらやま、けしからん!」

「ま、待てあの紅い髪を見たまえ!」

「マスクと眼鏡で隠してるけど、あのこもしかして……」

集まる視線と好奇の目に、少女はびくりと身を縮こませる。

そも人の多い空間が苦手なのだろう、青い顔をした彼女にゆかりが耳打ちする。

「茜ちゃん、大衆はジャガイモだよ……じゃがいも。」

「うう……じゃがいも、じゃがいも……オイシソウ……」

何やら催眠めいた呟きを繰り返しながら俯いた、少女は突然にして眼鏡を外す。

揺れていた視線はきりりと正面を向き、そして……そして……

「ひ……人違いですつ!!」

瞬く間にゆかりのてを引き、人を掻き分け逃げ去った。

「……行っちゃった」

「そうだよねえ、まさかあの子が琴葉茜なわけないもんねえ」

置いていかれた大衆は、再び各々街へと繰り出していく。  
今日は祭りだ、こんな事もあるうさと。

……  
……

『ポカリ好きかい？ポカリ飲むかい？』

青春はあ爆発や！』

陽気な音楽が繁く、少女と同じ関西弁のイントネーションの声とともに看板に併設されたレコオドの拡声器から流れている。

看板に写るきらびやかなせえらあ服の少女の顔。

それは奇しくもゆかりの手を引き、眼鏡をかけ直した少女のこの世の終わりのようなそれと同じものだった。

「うう、うちは何でこんなことしとるんやろ……声の仕事や言うてたんに写真とられてみんなみんなあつちのうちを期待しよるし……タイムベントが欲しい、いつそイマジンと契約して過去のうちを消して欲しい……」

頭が回転しすぎて知らないはずの世界の事まで口走る始末である。

そう、彼女は紛れもなく看板に描かれた少女であり、ゆかりと同様帝都東京の広告機関『キネマ館ニコ座』の活動写真に出演する声優であり俳優なのである。

活動写真のみならず、なにやら色々ときせられているようではあるが、引きずられながら、ゆかりは呟いた。

「私は好きだけどな、今の茜ちゃんもあつちの茜ちゃんも」

「ゆかりちゃん!？」

今度はゆかりが茜の手を引いて、立ち止まらせる。

「それに茜ちゃんは明るくならないと『色々呼び寄せちゃう』でしょう？」

『周りから見た茜ちゃん』のおかげで、身の回りもずいぶんスッキリしたんだし……」

「う、うう……それは、その……」

ゆかりの言葉に茜が逡巡する。

そうしてる間に、塔の方角から花火の軽快な炸裂音がこだました。

『お集まりし大日本帝都紳士淑女の皆々様、長らくお待ちいたしました!』

これより、東亜天樹閣完成記念式典を開催致しますあす!!』

町中に張り巡らされた蒸気導力パイプと併設する伝声管の拡声器からの声とともに看板のレコードを打ち消す勢いで、パレエドの管楽が鳴り響いた。

舞い飛ぶ紙吹雪に、蒸気のけたたましい産声を上げながら内部蒸気発生機関を駆動さ

せる鉄塔——大阪・浅草十二階、大帝都タワーに続く、第<sup>三</sup>式<sup>改</sup>型<sup>改</sup>蒸気発生基地、東<sup>とう</sup>亜<sup>あ</sup>天<sup>す</sup>樹<sup>かい</sup>閣<sup>い</sup>の威容にただただ少女も圧倒される。

「さ、いこ？茜ちゃん！」

「あ、うん……ま、待って」

公私の境を持つも、この場にいるのは只の少女であるならば楽しみたいと思うのは当然のこと。

ゆかりと茜は手を取り合って、パレエドを見に駆け出した。

カタリ。

その足元のマンホオルが、不気味に揺れた事に誰一人とて気づく事はない……